

埼玉県納税貯蓄組合総連合会会長賞

久喜市立太東中学校 三年 小川 胡桃

あの日から

令和7年8月8日、私は母とあるコンクールにチャレンジするため、北陸新幹線に乗って石川県の能登半島に向かった。金沢駅に到着し、能登半島を縦断しているローカル線を使って日本海側へと電車が進むと、のどかな田園風景と「能登半島地震」の被害を受けたと思われる景色が目に入った。それは、ブルーシートが掛けられた住宅の屋根である。金沢駅から40分ほど経過した頃から、ところどころ、屋根のてっぺんにブルーシートがあてがわれ、シートが飛ばないようにと、砂袋や紐で固定された家々があった。じっくりみると、駅の看板が斜めに倒れていたり、電柱が傾いていたりする。地震発生の二〇二四年一月一日から何日経ったのか数えてみると「600日弱」だった。七尾駅で下車し、がれきの山がまだ残っているのかと想像して歩いた。しかし、実際には街は落ち着いており、中学生の私には復興が進んでいるように見えた。市営バスの正面には「がんばろう 能登 がんばろう 石川」と書かれた旗が取り付けられていて、力が湧いてくるような思いになった。

震災が起これば被災地に届けられる救援物資の代金、そして救助活動や捜索活動、自衛隊や全国の警察、消防の方々の派遣費用に税金は使われる。人の命を守るための決死の救助に税金を投入することに反発する人はいないだろう。

甚大な被害を受けたこの場所が、今の生活を取り戻すのに、どれほどの人が手助けをしここまで辿り着けたのだろうかと考え、ボランティアの方々の協力と寄付金、そして政府からの復旧復興支援金＝税金だということに改めて気づかされた。私は、普段税金のことについて「払うもの」というぼんやりとした考えしかなかった。しかし、震災を受けた土地に足を運んでみると税金を納める意義がはっきりと分かった。日本は私が生まれた年の二〇一一年にも「東日本大震災」があり、それ以降も大きな自然災害に見舞われている。どれだけ社会が発展しても、自然の脅威や猛威には抗うことはできない。そんな時、日本の大切な人々を守り、そして健康で文化的な社会を実現するには、大きな費用が必要不可欠だ。今の日本は人口が減り、少子高齢化が問題となっている。そのため、私たちが税金の使い道を正しく理解し納めていくことで安心した生活ができる。

私は誰もが税金を通じて支え合い、安心した暮らしを築くことは責務だと痛感した。今、私は学校へ行かせてもらい、整った環境で授業を受けさせてもらっている。ただこの春で義務教育は終わる。これまで、私たちを支えてくれた方々からの税金に感謝するとともに、大人になってからの社会基盤となる税金を払い、互いを支え合う未来をしっかりと実行していきたいと強く思った。